

高田保馬の青春

田 中 和 男

はじめに

高田保馬（一八八三〜一九七二）は社会学者として出発し、次第に経済学へと関心を広げ、日本における数理経済学の導入にも大きな役割を果たしたことでよく知られている。佐賀で生まれ熊本の五高から京都帝国大学に進学、社会学を学んで広島高等師範学校、東京商科大学（現・一橋大学）で社会学を教え、一九二五年、九州大学に転じてからは経済学に重心を置き、二九年京都帝国大学経済学部で前任者の河上肇の経済原論の講座を継承した。その間、非常勤講師として、臨済宗大学（花園大学）、京都法政大学校（立命館）、関西学院、東京女子大学などで教えている。同志社でも一九一八年四月からの一年間、政経部講師をしている。第二次大戦中は文部省直轄の民族研究所所長など

社会学・経済学の研究者として多大な業績を残した高田保馬の学問的な出発点を確認する。一九世紀の後半に佐賀の農村に生まれた文学青年である高田は、文明化の一方で取り残された農民たちの貧困の現実を見て育った。地元の中学時代に救貧を論じた文章を発表したという。この関心は熊本の五高時代に一層、確実なものとなっていく。高田は最初、医学系に進むが文系に再度入学した。校友会雑誌の編集に携わり、自らも社会主義を紹介する評論を発表した。日露戦争の時期には、トルストイの平和論を好意的に論じている。人道的な監獄改良の先駆者であるジョン・ハワードを紹介しながら犯罪の社会的原因についても考察した。このように、高校時代の高田は貧困発生の社会的構造を探り弱者への差別を解消することに関心を向けていった。高級外交官子息である同級生の一高転校問題を発端とする栗野事件に対しても、特権者を優遇する学校当局の姿勢を批判した。栗野事件については社会主義の主張でも競合した同級の大川周明の政治的立場と対立した。高校時代の高田は社会学の必要性を認識し、社会運動のための理論構築のために京都帝国大学に進路を定める。しかし社会学講座の講師であった米田庄太郎によって、運動論的な視座が打ち砕かれ、高田は地道な理論的探求の道を選んでいくことになった。

を務めたため戦後公職追放となった。五一年、教職に復帰して大阪大学・大阪府立大学・龍谷大学それぞれの経済学部立ち上げに尽力した。高田社会学や経済学での高田の貢献と問題点についての研究は多くの蓄積がある。また、学問研究以外にも青年期より与謝野晶子・鉄幹が指導する明星派に属した歌人としても何冊かの歌集を発行している。

高田の死後まとめられた『高田保馬博士の生涯と業績』で、大部の著作や論文の一覧を見ることができ、生涯と業績の見取り図を描くことはできる。高田自身は、詳細な自伝は残していないが、折に触れて学問的な履歴を語っている。本稿でもそれらを資料として用いていくことになるが、本稿の目的は、社会学から経済学へと高田を推し進めた高田の経験と思想を、その歴史的な背景にも視野を広げながら論述することにある。¹⁾

アジア太平洋戦争が本格化する一九四二年に京都帝国大学で経済学を高田から学び、戦後には公職追放から復帰した高田の同僚として大阪大学法経学部・経済学部で勤務したのち、イギリス・ロンドン大学(LSE)の教授を長く勤めることになる森嶋通夫(一九二三―二〇〇四)は高田が「若い頃、社会改革を思い、人種問題、部落問題を論じた」という概括を、戦時期に高田の講義を受けた経験とともに語っている(『思想としての近代経済学』七五頁)。森嶋は、社会改革の内容や、人権問題・

部落問題についての高田の主張を具体的に紹介しているわけではない。しかし、高田研究の中でほとんど議論になっていない部落問題への高田の関心を指摘していることは興味深い²⁾。事実、若き時代ではないが一九二〇年代後半に幾つかの融和事業の講演会で部落差別の解決の必要を論じていたことは拙稿「高田保馬の部落問題論」で紹介した。ただし、一九二〇年代後半には高田は四〇歳代を迎えており、森嶋が言う「若い時代」を過ぎつつあった。

本稿では、森嶋の指摘する若い時代の高田が、部落問題・民族問題を含めた、社会改良についてどのような関心を持って思索を行い、それが後の社会学や経済学への関心とどのように結びついていったのかを検討してみたい。郷里の佐賀県三日月を離れて熊本の高高に入学する一九〇二年から、一九〇七年社会学を研究するために京都帝国大学文学部に入学して、講座担当者である米田庄太郎(一八七三―一九四五)の指導のもとで大学院に進学、高田社会学の基本がつけられ博士論文となる『社会学原理』が著作される一九一〇年にいたる時期を中心に扱うことにする。第一節で五高時代までの高田の伝記的事実の確認を行う。第二節で、五高時代に編集部委員の一人として参加した校友会雑誌『龍南会雑誌』に掲載された高田の論文の紹介と分析を行う。第三節では五高時代に発生した栗野事件の中での高

田の関与を考察する。最後の第四節では指導教師の米田庄太郎との関係を中心にして京大時代（学生）の高田を概観する。この時期の重要な課題である高田の社会学の形成過程については、紙数と筆者の能力の関係で、本稿では主題的に扱わず、後稿の課題としたい。

一 五高時代の高田保馬

高田保馬は佐賀県小城郡三日月村（現小城市）遠江に高田清人・クスの末子として生まれた。兄・清俊と三人の姉（フジ、モキ、チヨ）がいた。二〇戸前後の小さい集落で、代々神職を務めたという。高田によれば先祖に土地の豪族・今村孫三郎がおり一四世紀に足利氏から受けた感状が残っていたという（学問の旅）①（二六頁）。その後土着化し天台宗の僧籍を持つ山伏として「行乗坊と名乗った。屋敷に祠が残っていた。母の実家・楠家も同じ修験道を家職としていた（高田ちづ子「父のこと」四四七頁）。一六代目に当たる清人の代で維新以後、扶持を離れてからは自作農として暮らしを支えた。二人の作男を抱えた「中農の生活」であった（「私の追憶」①（五八頁）。清人は若い時代に鍋島藩の和算の塾に学んで三〇歳代前半の維新时期には「沢山の子弟を集めて教授」をしていた。また家業の祈祷との関係がある

医療なども行っていたという。高田保馬とは二五歳離れた兄・清俊に医学を学ばせるための「学資を作るために借金」をせねばならなかった。その支払いに「相当の苦心もしたらしい」ともいう。「別にせいたくなどは夢にも出来なかつた代りに、不自由な目にあふ」こともなかった（「父の追憶」二二（一六頁）。

幼少期の記憶として村の神社の「おこもり」や季節の祭事、暮れの荒神の角力、九月の祭りでは近隣の久保田から独楽売の声が入りこえてくると「幼い血がわきたつて来」たことを語っている。地元の三日月小学校は往復二里の道のりがあった。一八九七年、卒業し県立佐賀中学校（現・佐賀西高等学校）に進学した。町の中心である佐賀城址にある中学は県庁にも近かつたが、高田の家からは遠く往復五里の道を五年間、歩いて通学した（「郷土を懐ふ」二二（二四頁）。四〇五年になると下宿が普通になるが高田は通学を通した。入学の翌年に父が死去した。六五歳であった。高田は一六歳、働き手を失った母と高田を兄の清俊が経済的に支援をした。兄清俊は長崎の官立師範学校を卒業、鹿児島で視学を勤めた後、岡山医学校に進んだ。一八九〇年頃から三重県四日市で眼科を開業していた。清俊が四日市で開業したのは「結婚問題」などにかかわっているというが、詳細はわからない（「父の追憶」一七頁）。書道や歌にも関心があった。兄が高田の求めて送ってくれた『中学世界』や『文庫』などの文

学雑誌が「能力の乏しい文学青年」に「文学少年的趣味」を育てることになったという。貧困というわけではないが、豊でもない家庭環境と「近所はすべて小作人」であり「地主の圧力によって気の毒な生活」を送っているのを実見していた（私の追憶①五八頁）。文学的な情熱と相まって高田は貧困に代表される社会問題の存在を認識し出していたと思われる。

佐賀中学では、江藤新平の子息・江藤新作を指導者に担いで結成された「誠友団」に参加した。誠友団は単なる相互の親睦、弁舌の練習のみではなく、精神の修養を追加することで「天下国家を目ざしてゐた」という（「誠友団回顧」二九頁）。葉隠の伝統・薩長土肥の藩閥政権との関係もあり官界への志向性も強い。同級生の半数以上が軍人志望だったともいう。誠友団のメンバーの中に政界に投じた従兄池田秀雄、軍人で米内光政内閣の海相となる吉田善吾などがいた（私の追憶①五七頁）。『次郎物語』の著者・下村湖人（内田虎六郎）も参加したが通学地域が違い縁もわずか高時代に親交を深めたという。

高田個人は中学時代を通して「貧乏な人の味方となること」を将来の方向と考えるようになった（『洛北雜記』三二頁）。中学の校友会雑誌に貧乏に関する論文を発表した。中学五年の早春（一九〇二年二月末）に学校帰りの川堤の上から眺めた「夕日の壯観」に心打たれた時の決意を後年、語っている。「貧富の

懸隔をなんとかしなければならぬと思ひこんだ。……これからどんな方針をとつて進むにしても、悔ゆることなく死のう、悔ゆることなく死ぬ道は弱いものの為にするのである」と決心した（『思想流転の記』九頁）。この出来事は高田自身が述べるように「一生の方向を定める一つの要素」となった（私の追憶①五八頁）。社会を客観的に分析した結論というわけではなく、ふるさとや「あふれるばかりの母と姉との恩愛」に裏打ちされた「感傷的であり、ゲマインシャフト的（共同社会的）」な心情の表れでもあった（私の追憶①五九頁）。

一九〇二年中学校を卒業した高田保馬は、実家から離れた熊本第五高等学校（以下、五高と表現）に入学する。学費の援助を行う兄の助言による医学系（第三部）に入学をする。五高の医科進学は、しかし、一つの緊張を高田にもたらした。母の住むふるさとから離れた生活を始めるという点で少年期からの断絶と、医科の選択自身が、必ずしも高田の希望に即さないという不満であった。先述のように中学時代に「文化肌」であった高田としては文科系の「一部に行きたいというほんやりとした希望」があったが、兄と近親は医科を勧めた。「春休みにはなるばる四日市に……相談した」。兄は「決して高圧的ではなかったが自分と同じ方向をやらせたいという考」であった（私の追憶①五九頁）。

「医学の基礎である「自然科学の冷たく厳しいのに耐えきれ」ない気持ちや「ぐんぐんと進む」数学について行くだけでも「一通りでない」と感じた（「私の追憶」①五九頁）。しかし後年、「三部一年の数学の知識力」がワルラス、パレートなどの数学を使った経済学理解に「何らかの便宜を与えた」ともいう（「私の追憶」②五七頁）。一方で、高校の「士会」という異学年・異学部（部の学生をメンバーとする交友結社に属した。下村湖人ともこの会を通して改めて知己となった。「武夫原頭に草もえて」で始まる五高寮歌の作者である恵利武と、緒方竹虎の兄に当たる緒方大象という二人の先輩を忘れられない人物として幾つかの回顧の中でもあげている（「私の追憶」②五七頁）。

勉学に打ち込み、交友関係を持ちながらも、高田にとつての医科系の三部の生活は「幸福を感じさせない」ものであり、「詩の世界へのあこがれ」は止むことはなかった。高田は兄に事情を説明し、歌にも理解ある兄の同意をえた上で、翌年の九月、文系の一部甲類に再入学を果たす。「もとの同級生より一級おしなげられた淋しい気持ちと、しかしのびのびとすきなことがやれる」という希望が交錯していた（「私の追憶」②五七頁）。寄宿舎の同室に、終生の友人となり、京大への進学についても選択方向を決定させた瀧正雄（一八八四〜一九六九）がいた。愛知県出身で京大に進学、経済学の研究者を目指したが、政治家志

望に転向、政友会の総務、戦時期には企画院総裁を務めることになる。また、高田は一九〇四年四月からの一年、校友会雑誌の『龍南会雑誌』の編集に参加するようになり、編集の同輩として下村湖人（一八八四〜一九五五）との交流が親密なものとなった。下村は下村家に養子に入る前であり内田夕闇という号で『帝國文学』にも寄稿し出していた。^③東北酒田出身で後に国家社会主義者として著名になる大川周明（一八八六〜一九五七）も、高田らが編集委員を辞任した次の年に『龍南会雑誌』の雑誌部委員となった。『龍南会雑誌』で高田の論稿と大川との学内での対立をもたらす栗野事件については次節で論じることしたい。同窓で官界に進んだものとして、農相・内相を務めた後藤文夫、下村の親友でもあり青年団運動の指導者として著名な田沢義鋪がいた。こうした環境の中で、高田も「一時は東大独法に入ろうかと思ったこともある」とも述べる（「私の追憶」③五七頁）。

文科に替わった五高時代は、一年の休学があり四年に及んだ。高田は冗談半分に「私は屢々五高の多額納税者」と言うように三部の時代を含めて「五年間月謝を払った」。「五年在学、同級生には二回追い抜かれる、これが一生涯のハンディキャップになった」ともいう（「私の追憶」②五九頁）。遅れたもう一年は、病気に伴う休学であった。文科三年目の一九〇五年一〇月頃、肺

尖カタルにかり、鹿兒島に転地をして療養生活を送った。瀧正雄は、高田の世話のため同じように休学して、鹿兒島に赴いた。翌一九〇六年四月、佐賀に帰り九月に復学した直後、栗野事件に巻き込まれた。その前後、熊本の学生生活の中でドイツ語の勉強にも努力を怠っていない。五高のドイツ語教師をしていたウエンクステルンの家に寄寓し、「食費を払って、その代りに、通弁」をしたという。高田は注釈して「その役には殆ど立ちえぬほどの語学であつた」としている。ちなみに、このドイツ語教師の家は、夏目漱石の五高教授時代の借家であつたという（「千反畑の家」一―三頁、「私の追憶」③五九頁）。この時期の師についてはJ・S・ミルの経済学やスペンサー社会学を原語で教えた奥太一郎などにも言及している（「学問の旅」①二七頁）。

高田の五高時代（一九〇二―〇七）は、日露戦争をはさむ時代であつた。満州から撤退しないロシアに対する強硬外交を主張する世論が高まり、日英同盟が結ばれる。一方では幸徳秋水・内村鑑三などの非戦論の主張があり、幸徳たち社会主義者は日露開戦を批判する平民社を結成する。開戦前後には与謝野晶子の「君死に給うこと勿れ」の詩が非国民的だと非難される。五高においても、一九〇四年一〇月、校長桜井房紀を会長とする熊本講武会が結成された。「武徳ヲ修養シ士氣ヲ振作セシメンガ為

メ……精神ヲ練磨シ心胆ヲ鞏固ナラシメン」ことを目的とした。戦勝の際には祝賀式を頻繁に開催している。旅順陥落では「祝賀式を挙行し、式後隊列を整へて、職員と共に花岡山に登」つた（『五高五十年史』二五八―六〇頁）。その一方では、校友会誌『龍南会雑誌』には高田や大川周明などの社会主義を主張する論考も発表される。

政治的には挙国一致の日露戦争の時期は、精神的には一九〇三年藤村操の華嚴の滝自殺事件に象徴されるように青年の自我の自覚と非政治的領域への関心が広がった時期でもあつた。高田保馬も同じ時代の空気を吸っていた。高田は社会主義の思想への関心を広げるとともに、心情や信仰が満たされることを求めていた。後述するように、社会主義への関心は同時代の幸徳秋水の著作（例えば『社会主義神髓』）や平民社関係の雑誌、宗教的な関心と絡まってトルストイの著作（例えば加藤直士訳『我宗教』など）を読んだ。また、この時期に長崎を拠点にして九州一帯に伝道活動を始めていたキリスト教メソヂスト派の牧師・笹森卯一郎（一八六七―一九一一）の説教と講演に「烈しき精神的衝撃を受けた」。「はじめはその文学講演にひきつけられた。……その熱烈なる信念に揺り動かされた」（「私の追憶」③五七頁）。

笹森は一九〇四年二月六日、熊本三年坂教会で五高のキリス

岌々乎として危い哉」とする。「我五高か重きを天下になす所以はたゞ其剛毅にして朴訥真摯にして熱誠なる校風にあり今の日本が真人物を得るの希望は殆こ、に存し未来邦国の危急存亡はすべてこ、にかゝる此の校風の危機何ぞ其意義の重大なる」〔摺筆の辞〕『龍南会雑誌』一一〇号（一九〇五年）i~ii。

高田は、個人的にもこの時期の変化を体験的に語っている。校内の事情として「明治三十六年から入学試験の方法が改められて、五高の学生の構成に急激なる変化が来た。都会の気風が目立つて入りこんで来た。これに対して、以前の校風を固守せねばならぬといふ気持が学生の一部に強かった。……浮華の風を戒め、剛毅朴訥を奨励した」。学外の事業としては「日露戦争という空前の大戦争」で「国家的興奮のまださめぬ」時期ということであった（「恵利武さんのこと」『龍南会雑誌』二二八号（一九三七年）三四〜五頁）。

学生の構成の変化の中で、東北から大川周明が高田再入学の翌年、一九〇四年夏に入学した。五高は第三志望であったという（大川周明「呶々録」⁶五五頁）。大川は在学中、「黒潮会」という社会主義的思想を広める研究会を作った。高田の友人である瀧正雄、赤松智城などもメンバーであった。大川は一九〇六年には『龍南会雑誌』の雑誌部委員に選ばれた。高田の知己・緒方大象が含まれる。高田は後年、五高における社会主義の影響

を強めた大きな役割を大川が果たしたと述べている（「思想流転の記」一二頁、「私の追憶」③五六頁）。高田本人は、次節で述べるように、『龍南会雑誌』に社会主義を主張する論文を発表している。「全国の高校の雑誌を通じて最も早く社会主義のことを論じたと信じている」ともいう（「私の追憶」③同頁）。社会主義についてはライバル意識があったのか、高田は黒潮会にはあまり関与していないという。一九二〇年代以降は、マルクス主義批判者として高田は論壇でも注目を集めることになるが、二〇歳代までの高田は、これまで見て来たように貧困の解決に心を悩ます社会主義にシンパシーを表明していた。この点を含めて、次節では、五高の時代の高田保馬の思想に焦点を当てて論じることにする。

二 五高時代の高田保馬の思想

少年期から貧困の問題に関心があった高田保馬は、一九世紀末以降の日本での社会主義思想の浸透という社会的背景のもとで、五高時代においても社会主義に関心を持ち続けていたと推測することはたやすい。校友会雑誌『龍南会雑誌』に編集委員として関与した際にも、社会主義の主張に賛意を表す幾つかの論稿を発表している。後年、高田は五高時代の思想を振り返っ

て、『龍南会雑誌』の発表した論稿が「貧乏や人口の問題につながったことだけは間違いない」と位置づけていた（「私の追憶」③五六頁）。

高田がこの時期、『龍南会雑誌』に発表した論稿は次の通りである。「社会主義と詩人」第一〇一号（一九〇三年一〇月、「我理想郷と競争」第一〇二号（同年一月）、「東欧の大聖を懐ふ」第一〇五号（一九〇四年三月）、「わが牢獄観①③」第一〇六号（一九〇四年五月）、「感情の侮辱」第一一二号（一九〇五年六月）。他に、和歌二〇首を高田天山の名で発表した「暗森」第一二四号（同年一月）、さらに平井三男、内田虎六、佐々木良綱、太田黒作次郎、高田保馬の編集からの辞任を表明した「擱筆の辞」第一一〇号（同年三月）がある。文科に再入学した時期から病気のため鹿兒島に転地療養するまでの時期にあたっている。

この時期の高田の関心は中学時代の貧困問題への目覚めを発展させた社会主義への関心に彩られている。「社会主義と詩人」は自らの詩人としての立場を社会主義の主張と結びつけている。我理想郷として語られる社会主義は、個性の競争を促進することに反対するものではなく、「東欧の大聖」で紹介されるトルストイの禁欲的な平和主義とも重なる穏健な性質を持っていた。社会主義の視点から犯罪の原因には貧困があると考え、犯罪者

処遇の改善の方法を「わが牢獄観」では追求しようとしている。それぞれの論説について論点を簡単に紹介しておく。

「聞かずや、富豪が傲慢の凱歌、貧民が苦痛の悲鳴を」（一〇頁）で始まる「社会主義と詩人」は高田の自らの立場と主張を明らかにしている。富豪の傲慢と貧民の苦痛が社会的な背景をもつことを指摘する。「マルサスが級数の比較より人口論を説く」ことで定着した「弱肉強食」は「明敏清徹なる彼ワットが脳裏に造化の秘儀を彫みて」からは「散在せる個人の工場、集められて一大組織をなし」ていった。その背後で「階級の懸隔」と「自由競争」という「不具の成長」をもたらした（一二頁）。しかし、高田は、産業的革命思想のマイナスのみを主張しているわけではない。「宿昔個人的なりし労働は茲に社会的に變じ、個人的生産物、従つて社会的生産物とはなりぬ」が現実だという。「矛盾こゝにあり、撞着こゝにあり……何ぞ知らん、實際其帰する所を見るに、資本家てふ一個人に限らるゝを。……労働者は空しく糊口の資を得るに窮するのみ。嗚呼一方の掠奪、一方の沈淪」。高田は「人道の戦士」であるカール・マルクスの「慷慨痛論」を自分の感情として表明した（一二―一三頁）。従つて「社会主義は製作したるものに非ず。既往の仁人が、此悲惨と酷薄とを見るに忍びずして自ら其の胸中に湧出したる愛が、しばらく形態を變せるものゝみ」（一六頁）。

勿論、高田は社会主義への批判が世に満ちていることを知っている。この論文もそれらの批判に反駁するものであった。高田は反社会主義の主張には「三種の音色」があるという。「第一は社会主義に対する一般の誤解」である。「第二は社会主義実行の結果を危疑し、之を以て競争を減却すとす」もの。「第三は深遠なる学理の打算に非ず、又憐れむべき誤解の結果に非ず、たゞ漫然として排斥するもの」(二六〇七頁)である。こうした誤解に対して、高田が対置するのは「人道」であり、「愛の主張」であった。

「社会主義は畢竟愛の主張也。愛なくば社会主義なき也。夫れ仁人君子の慈眼、社会の欠陥を認る時無限の哀傷あり、絶大の同情あり、抑えんと欲して抑ゆる能はず、止まんと欲して止む能はず、其の至誠熱血の迸ばしむ所、遂に該主義の唱道となりぬ(一八頁)」。

こうした社会主義に対して詩人はどういう役割があるのか。高田はカーライルを引用し、フイヒテに言及して「詩人は熱誠也、真実也、而して彼は深く視、遠く察する也」と考える。それは何故か。詩人は「只よく愛するを知ればなり」。「愛は社会主義てふ形態をとらざるべからざりし也。人間が無弦至高の琴線にふる、もの、胸中の愛を流露せしむるもの、たゞ夫れ詩也とせば、現今暗黒の世に於ける社会主義の発展は真の詩人の出

頭に非ずんば得て望むべからざる也」と結論する(二〇〇二頁)。

「我理想郷と競争」では社会主義に対する誤解として挙げられた「競争を減却す」とする批判に答えようとしている。この論文でもまず「今日の吾は社会主義の実行を以て、全人類、少くとも、自ら信じて肉を去り靈に近づけりとする開明人種の急務とするもの也」(二三頁)と自己の立場を確認する。「吾人の理想郷はマークスの所謂社会主義的生産の行はれたる時を指し、決して寂然として不動なるものにあらず。不動は不可能也。進化の理法に反す」という(一五頁)。ここには社会主義への道が「進化」と捉えられていること、しかし「物的競争を超越して心的競争に到達」という進化の質の「進化」が求められていることが注目される(一五頁)。

「吾人を形成する個々の細胞は尽く生命を有せる核と原形質とを含む。夫れ生命は沈滞に非ず、墮落に非ず、向上也、精進也、嗚呼此等細胞の最完全靈妙に組織せられたる吾人はたゞ夫れ活動あらんのみ」(一六頁)。自然と社会に生きる人間の活動は生命に根差した向上と精進を遂げる。だから、ウイリアム・モリスがいうように「人が財貨の為に心を勞するなきに至るも、技芸、万有、恋愛等は人生に与ふるに趣味と活動とを以てすべし」(一七頁)と。

確かに、「人口の増加は遂に止む可らざる自然の勢也」、これが即「生存手段」の不足に連動するのか。自然は他方で人間に「永久不変の他愛的感情を与えている。人為は人之を破壊し改造するを得む、而も焉か得て自然法則の変革を望むべけんや」。自然にも大調和が存在する可能性がある。様々な問題に「調和の光明」を与える「小丘的社会組織」が構想される必要がある。「自然淘汰は遂に避くべからざる運命也。競争は止むべからざる事実也。之を以て吾人は他愛的感情の発展に迫られ、社会主義的生産を行はざるべからず」。人類は「蛮野禽獣の域を遠ざかりて万物の霊長」になりうる。競争も「肉を去りて靈に就かしめ」る必要がある(二〇〜二二頁)。それこそが高田の求める社会主義の実行であった。

トルストイ(一八二八〜一九一〇)の宗教観・平和観を紹介した「東欧の大聖を懐ふ」は一九〇四年三月に発表されている。この時期の日本は、前節でも触れたように、二月四日の明治天皇の開戦の裁可を前提にして六日にロシアに対する国交断絶通告、八日、旅順・仁川での奇襲実行というように日露戦争の本格的展開の時期にあたっている。ロシアに対する敵対的な世論が一層強くなっていた。一方で、対露開戦を批判する平民社は三月一三日付けの『平民新聞』(一八号)で「与露国社会党書」を掲げ、その返答を七月二四日の三七号に「露国社会党より」

として掲載した。八月一四日に開催された「万国社会党大会」の席上で日本からの片山潜とロシアのプレハノフが公然と握手をした。六月にロンドンのタイムズ紙に発表された「平和主義的博愛主義の立脚地」をもつ「トルストイ翁の日露戦争論」が八月七日発行の『平民新聞』(三九号)の巻頭に掲載されている。次の四〇号では幸徳秋水は「トルストイ翁の非戦論を評す」で「戦争の罪悪」についてのトルストイの批判には「感嘆崇敬」するが、宗教的懺悔ではなく、社会主義的制度の構築によって戦争に反対すべきだとした。こうした歴史的背景の中で、あるいは情勢の変化に先んじたように高田がトルストイを紹介しているのである。

高田はまず、西洋世界の宗教的に基礎づけているキリスト教、キリストについて次のように述べる。「西亜の神の子悠然として下界を去りてより、大地の回転、歴史の葉々を翻して世紀更ること十有九、顧みれば彼が説きし所唯に利剣と鮮血とに過ぎざりしか、否、彼は肉的生命の夢幻に等しかるべきを説き、広汎の真愛によれる無窮の永世を教へ、疾呼して曰く、天国は近かりと」(一一頁)。

「博愛と正義と人道との文字は誠に基督教国にとりては光榮ある外装」であるはずなのに、現実はどうか。「敢て問ふ、自己の利益の為に他の権利を侵害し、自己の優強を恃みて弱小を蚕

食せむと力むる、果たして聖教の真髓なりや」。西欧が腐敗して
 いる証拠として「王権神聖の迷信に耽り、暴虐と酷薄の外民を
 御する法を知らざりしチャールスを断頭台上の露と化」したこ
 とを例示する。「外装ありて真髓なき」キリスト教世界に「一世
 教導の大任」を果たすために現われたのが「ヤスナヤポリヤナ
 の老農、現代第一流の詩人、而して実に東欧の大聖レフ、ニコ
 ライキツチトルストイ翁」であると高田はいう（二三―一四頁）。

トルストイは、詩人としてだけではなく、処女作「生立の記」
 で名声を博し「哥索克」^{コサック}「戦争と平和」「アンナカレンナ」の作
 者として「ツルゲネーフ」と並ぶ「露国文壇の二明星」だと紹
 介する（一四―一七頁）。とくに「預言者として」は『我懺悔』
 以来、「真髓を欠如したる現欧州の偽基督教文明」を批判した姿
 勢を評価している。真髓とは「悪に敵する事勿れ」の「一語」
 であり、「献身的真愛」により「真正の幸福を享有すること」で
 あった。「其理想とする所は現代の盲目なる物質的、肉慾的、主
 我的文明の潮流に逆航して、直ちに原始基督教の聖なる神の国
 を斯世に現出せむとするにあり」とした（一七―一八頁）。トル
 ストイにとっては膝下のロシアは「上には圧政を事とせる専政
 のザー（ツァーリ……引用者注）あり、助くるに頑迷固陋、残
 虐を事とする正教会を以てす、下には虚無党の破壊を之れ天職
 なりと誇称するあり」が現実であった（一六頁）。

では日本はどうか。「頭首を回せば今吾人の周囲をめぐるも
 の、排斥に非ずんば罵言也、嫉妬に非ずんば怨恨也、憎悪に非
 ずんば紛争也、残忍に非ずんば圧政也、利剣に非ずんば砲丸也、
 鮮血に非ずんば死屍也。苟も人類の皈依を考へ和平を慕ひ幸福
 を思ふもの、誰か暗涙の潜然たらざるものあらむや。此時に当
 り儼乎として一管正義の鉄笛を吹く大聖出で、悲哀の暗黒に
 沈める我に光明を与へ、我胸中の波瀾を静ならしむ。あ、われ
 等が頭に永しへに宿れトルストイの愛」（一九頁）。

ここで高田は日露開戦を直接論じているわけではない。しか
 し、ロシアの現状について高田も批判的に記述しているのはい
 うまでもない。それ以上に平和主義者としてのトルストイが意
 識されている。トルストイについては次に紹介する「わが牢獄
 観」でもしばしば言及しているが、とくに連載三回目にはトル
 ストイの『我宗教』から引用を行っている。「余ははや財産を得
 むと欲する能はず暴力に訴ふる事能はず暴力によりて人の生命
 財産を維持せむと期する凡ての勢力に我力を竭す能はず裁判の
 神聖と行政との職権とを奨励する能はず」（一九頁）。

日露戦時期の高田にとってはトルストイへの「思慕」は強烈
 であり、戦時期に主張されたことの意味も無視できない。後の
 和歌の師となる与謝野晶子の非戦詩「君死に給ふこと勿れ」が
 意識されているわけではない。共同執筆の「擱筆の辞」にある

ように、また恵利武との交流に表れているように与謝野寛（鉄幹）の戦争肯定に繋がる思想的雰囲気が高田のまわりにはあった。与謝野晶子・鉄幹の明星派に弟子入りするのは京大時代の一九一〇年を俟たねばならないが、鉄幹の甥である赤松智城が周囲にいたから、晶子が非国民的な批判にさらされていることにも関心がなかったとはいえない。そうした中でトルストイについての肯定的な立場表明であった。⁷⁾

三回にわたる長い論文「わが牢獄観」は監獄改良で著名なジョン・ハワード（一七二六―九〇）を紹介する形で、犯罪が個人の資質や道徳的墮落に起因するのではなく、「犯罪は貧困の結果のみを主張」したものである。後年の回顧では「唯物史観を思わせる道徳の相対性を論じたものであるが『思うて学ばざる』井蛙の児」という評価をしている。この論文の背景として「獄中の人の苦痛に同情をよせた」中学四年の詩の存在を挙げている（「私の追憶」③五六―五七頁⁸⁾）。高田にとっての出発点は獄中の人の苦痛に対する同情という人道主義的な感情であった。ジョン・ハワードもまた、高田によれば「牢獄制度に対する憤慨の念」により、博愛と仁義に合わない監獄の現状を改善するため「勇躍奮起」した「慈悲の化身、博愛の権化、情熱の凝塊」であった（「わが牢獄観」①一八頁）。現状に対する「憤慨の念」を高田は共有している口振りである。

大状況について言う。「吾人をして現代に対する観察を大胆に告白せしめむか。曰く、吾人は二十世紀文明を呪詛する念に堪へざる也」としたうえで現代が「主我の肉慾を根拠として、人は人とせめぎ、国は国と争ひ、民族は民族と闘ふ。何人か現代の平和を見よとは云ふ」（①二二―二二頁）。

現実に対する批判は、これまで見て来た高田の観点が継続していることが窺える。この論文では犯罪問題に焦点を当てて高田は論ずる。「吾人は牢獄に投ぜらるゝ、罪囚そのものに就て、大いに疑問を挟まざるをせず。而して第二の問題は、牢獄の待遇が非人道なることに関す」（①二三頁）と二つの課題を例示した。実際には、第二の牢獄の処遇の問題は論じられないままに終わる。

高田は「犯罪の原因」として一般に論じられる「遺伝によれる悪性、劣悪なる家庭の感化影響、教育の不足、悪友との接近、飲酒」など犯罪者の個人的原因を紹介した上で、此の捉え方の不十分さに言及する。犯罪の発生を探索すると「いづれにも、其の根帯にひろがりて流れたる誘惑の泉は『貧』てふ一大事実に非ずや」（①二四頁）と。こうして犯罪の社会的背景を考えると、近代の「工業興隆」の現実につづかる。工業の発展にとまない一方での「工業的予備兵」(Industrial reserve army)の増加は「貧しき者、芸能と体軀を抱いて資本家の門に走るや、

営々として命惟従ふもの、終年一日の寧日なし」(①二五頁)との状況をもたらす。生活の糧、教育のない物が犯罪に追い込まれる。「貧者に何の罪ありや、彼は依然として清浄無垢の『人』たるなり。然れども、記憶せざるべからず、貧者は弱者也、社会が造りし境遇は、彼等に迫りて其行為を社会に合一せしめず、立法者と、衆愚と、先づ叫びて曰く、罪惡と、和して同するもの、また曰く、罪惡と」(③三三―三四頁)。

ジョン・ハワードの存在はこの時期以前から人道主義的な監獄改良の先駆者としてよく知られていた。早くは福沢諭吉の『文明論之概略』においても言及された。ある人の言として「ジョン・ホワード」が「勉強に由て獄屋の弊風を一掃した」と紹介している(岩波文庫、一九六二年版一四―一五頁)。一九世紀末から二〇世紀初頭の日本の監獄・刑務所の制度化の中でも、犯罪者の処遇の人道化を唱える留岡幸助や小河滋二郎らによって取り上げられている。留岡は一八八八年の論文の中で「泰西第二の救世主」として「ジョン・ハワード」を紹介している(「人事の美妙は複雑変遷の時にあり」『基督教新聞』年一〇月一七日『留岡幸助著作集1』四―五頁)。監獄改良の必要性は、社会主義の側からも、高田の論文と同時期に一九〇四年四月に堺利彦が平民新聞の編集・発行人として有罪となり監獄に入ったのをきっかけにした木下尚江「監獄内より観たる社会」が『平民新

聞』二六号(一九〇四年五月)に発表されている。

この時期の最後に書かれた論説「感情の侮辱」は内容が推測できない不思議なタイトルをつけられているが、社会の改良の必要性を知性ではなく感情の復権と関わらせて主張している。「圧政と苛酷」が支配した徳川幕府を倒したのは「勤王の烈士」と憂国の志士の「青春の鮮血」であることを確認した後、「チョン鬚は散髪」に変わったとしても輸入された「西欧の文化」の結果は「世を蔽ふものはこれ実利の低卑なる思想のみ」とする(二―三頁)。その中で「意志は吾人が唯一の武器也、感情はむしろ之が障碍のみと」する「意志の偏重」が極度に達している。果たしてそうか、と高田は尋ねる。「感情を伴はざりし意志を見よ、彼に果たして何等活躍の力ありや、生動の気ありや」(三頁)。この意志と感情の関係は恋愛だけではなく社会にも当てはまる。「社会を以て一の有機体とせば個人は当に其細胞也……激発の真情至誠、自己に絶大の変化を遂げ、胸中熱火の炎々たるもの、ひとり其変化せる形態を以て悠然他の細胞に雄飛し、其熱火を点してはじめて社会に光明あり、改新あり、真人か偶然高擧、庸俗の上に据座するもの豈他にあらむや」(五頁)。

アレキサンダーやワシントン、ナポレオンという政治家だけではなく、「トルストイをして永遠の平和を唱道せしめたもの、尽くたゞこの感情の力」(五頁)である。高田は知性だけではな

く感情の役割を復権させ、変革の主體的な力となる天才の熱情に期待する。「社会の変化と革新は天才の事業にまち、天才の事業は狂熱によりて成る」(六頁)。日本の「維新鴻業の原動力」もそうであり、トルストイの人格にもこれがあふれている。「吾人は平凡を排す、過去の實内に踞踏するものに抗す、社会は救はれざるべかられば也」(七頁)。

五高の『龍南会雑誌』に掲載された論文の内容を紹介してきたが、その特徴を確認しておく。最後に引用した社会は救われざるべからざる表現にあるように、高田は現代社会の救済・変革の必要性を強く感じていた。労働者を搾取する経済構造の問題としては社会主義の観点に影響を受けている。後の回顧では、「社会主義と詩人」を書くについては幸徳秋水の『社会主義神髓』の影響を語っている(「私の追憶」③五六頁)。「社会主義化は世俗的権力的な政治家の手によるよりも詩人の思想によって促進される」と考えた高田にとって幸徳の思想が「孟子の国家思想によって西欧の社会主義を組織立てた」ところがあった点で「強く動かされた」という(「私の追憶」③五六頁)。君主の善政や志士仁人の行為を強調する幸徳秋水の社会主義観は、高田の観点に浸透していると思われる。

これは、詩人の役割の期待に表れているように、社会改良についても、民衆自身の主体的行動よりも、指導者の主体的役割

を期待するものであり、換言すれば、高田自身のエリート意識が表明されているともいえよう。トルストイに対する評価も天才としての人格への期待であろう。

社会主義への共感や文明を否定的にとらえるトルストイの評価は、「近代」に対する呪詛を共有しているように思われる。「社会は活機也、停止を知らず」(「感情の侮辱」一頁)、あるいは「生命なく活気なき安静は、人生進化の道程に於て当然呪詛されるべき最不祥事」とも主張される(「感情の侮辱」四頁)。社会の変化と革新がもたらしたものは、資本家と労働者の隔絶という社会問題の深刻化に過ぎないことも高田は認識している。無政府的な資本家の生産がもたらした貧困を解決するのが社会主義的生産の実現にあるにしても、それを実践する主体を高田は志士仁人や天才に求めるほかない。高田は農民や農村青年を想像しえても、工業労働者や工業的予備兵を主体として想像することは難しかったと思われる。

『龍南会雑誌』に高田は高田天山の名でいくつかの和歌を残している(一九〇五年一月)。下村湖人(内田夕闇)との応答の和歌を含んだ「暗森」と題した二〇首の和歌である。三首の内田の和歌の中に「たどり入る森のくらきに何なげく、朝ともならばゑむ花あらむ」があり、これが「暗森」のタイトルに生かされているのが分かる。これに対して高田は二首の返しをした

ためた。¹⁰⁾

運命(さだめ)なり求め入りにしとこやみの森の光のありし
とし思ふや

跡もなうわが名は黒くぬられたり野には吹けく春風秋風

三 栗野事件と高田保馬

すでに触れたように、青年・学生層に自我の覚醒による自然主義の浸透と、社会の発見につながる社会主義の影響力の拡大は、挙国一致で戦われた日露戦時だけではなく、日露戦後の政府指導層にとっては対策が求められる課題となったことはよく知られている。早期的な大衆社会現象とでも呼ぶべきものが二〇世紀初頭の日本には現れ始めていた(岡義武「日露戦後における新しい世代の成長」)。各地の高校でも学校騒擾と呼ばれる動きが目立ってくる。

日露戦争以前から、五高の中でも風紀弛緩を防止する動きが活発化してきた。桜井校長の就任にともない、一九〇〇年から、入学式の際に飲酒・喫煙などの風紀に係る行動をとらないことの宣誓が求められ、生徒の禁酒に関して保護者に通告を行った(『五高五十年史』二一一頁)。寮や学内においても、風紀の確立、修養を實踐する団体が結成される。高田保馬も、一九〇三年の一

部入学に際しては習学寮に入寮し一学期に「学寮会幹事」を務めている。学内にも、校風・礼儀。漢学を重視する修養派と非修養派に分かれたて行ったといわれている(『習学寮史』二二二頁)。大川周明を中心にした「黒潮会」も、大川の主観的意識はともあれ、儒教の「伝習録」の講義と横井小楠を理想的人格とする点で修養派といえなくはない(大川「呶々録」五六―七頁)。高田も一九〇五年五月、五高の「校風改善発揚」を期して「中堅会」を結成した。「自己の修養を志し」、五高の「美風の中堅」たらんことを目指した。高田のほか、谷龍之助など一二名が発起人であった(『習学寮史』三七五―七六頁)。この動きに対して大川は「修養家」はやがて偽善者を意味するに至るとして「其一員たるべき勧誘」を受けたが「聊か見る所を異にせしかば遂に辞するの止むなきを出でたり」とした(大川「呶々録」五六頁)。こうした非難の中、中堅会は頓挫する。¹¹⁾

くすぶっていた「学校の圧制」(大川の表現)に火をつけたのが栗野転校事件であった。これに大川も高田も異なった立場で関与することになる。事件の経緯は次のようなものであった。¹²⁾

日露戦争が終結し、ポーツマス条約締結をしたものの、内容が不十分なため日比谷焼打ち事件が勃発、桂内閣が辞任して翌年、一九〇六年一月西園寺公望内閣が成立した。桂内閣からの申し送りとして駐露大使として日露の交渉にも功績があった栗野慎

一郎が、駐仏大使としてパリに赴任することになった。その留守宅の栗野の母を介護するために、五高の学生であった栗野昇太郎を五高から東京の一高に転校させることが画策された。昇太郎は高田の友人でもあった。栗野の家庭内の事情の解決が内閣（文部・外務）を巻き込んでいった。当時の慣行として、高校間の転校は認められていなかった。栗野昇太郎の転校を求め文部当局の命令を一高校長の狩野亨吉は拒否、そのため、狩野は京都帝国大学文科大学に転任させられる。新渡戸稲造が新任校長として任命される以前の一九〇六年三月末、文部省は省令を改正して、栗野昇太郎の転校を許可した。五高の桜井校長も転校を承認したということで、栗野は九月から五高から一高へ転校して通学することになる。こうした動きに対してまず一高の学生が抗議に立ちあがる。栗野の五高への復校を求める決議を行い「善後委員」が今井校長代行、新任の新渡戸校長と交渉した。学生から無条件一任を受けた新渡戸は校長会議に諮り、栗野の一高転校を既成事実化した。

この動きが五高にも波及した。転校問題と学内の圧政への批判が結びついていく。一〇月二日、学生側の総務委員が校長室を訪ね、栗野の転校についての説明を求めた。翌日、学生側は龍南会委員を含めて評議会を開き、総務委員から校長が文部省の訓令により栗野の転校を許可したとの説明を受ける。「会衆

皆黙す可きに非ずとし」各クラスの意見を聞くことにする。四日、第二回評議会を開き、赤松智城、大川周明、高田保馬、柏木純一など九名の委員に交渉を委託することに決定、五日、校長との交渉に及んだ。校長は「不正の命令に黙柔せりと云はる、も余は文部の命令を以て決して不正なりとは認めず。認めざるが故に従へり」という。結局「熟考の後回答」として深夜、帰校した。六日生徒大会が開催され「事件の成行」が報告された（「転校事件顛末報告」『龍南会雑誌』四八～五二頁）。

大川は次のように説明している。「校友は先づ九名の特別委員を撰び、校長に対して「禍根を将来に絶たむが為に充分なる尽力」をすることと誰がその「責に任ぶべきか」を問題にした。数回の交渉で与えられた一〇月九日の校長の回答に対して、同日直ちに運動場の芝生で「生徒大会」が開かれた。「問題は転校事件より移りて学校に対する不平の爆発とな」った。「忌憚なく遠慮なく教頭並生徒監を攻撃し非難し、会衆は狂せむ許りに拍手喝采したり」（大川「呶々録」五七～八頁）。この年入学したばかりの大内兵衛は二〇年後次のように記している。「私共が入学して間もないことであつた或日上級生の人から全校生徒皆武夫原に集まれと達せられた。私共はそこに集まつた。誰かが立ち上つたと見ると教頭排斥の大演説が始められた。一人が終るとまた一人が立つた。そして全く恐るべき程の熱弁がつゞい

た。そして全校の生徒は熱狂して校長問責、教頭排斥の動議が成立した。之はまことにすさまじい勢であった。教頭排斥の大演説を行ったのが大川だとは書いていない。卒業後、法学博士となった人物が「諸君立とうではありませんか？」との「名演説」をした本人としている（大内「龍南の思ひ出」『龍南会雑誌』二〇〇号（一九二六年）七七〜七八頁）。

五〇年後の高田は冷静に経緯をまとめている。一高での学生の反対運動の「檄が五高に飛んだ。五高側学生も起ってその責を問うた。校長はこれに応じなかった。学生は憤激して教頭に辞職勧告書を殆ど全学生の署名によって提出した。結果は校長教頭の辞職、数名の教授の休職転任となり、学生側には一名の処罰もなく、問題は終わった」。こう回想した高田は栗野事件には二つの事件を含んでいたという。一は「不公平なる転学許可事件」でありそれに対する校長の責任問題である。二は学内の学生束縛に反対する「教頭排斥事件」である。前者については高田が「仕掛け人」だとし、「この機に乗じて」運動を後者に転じさせた「主導者」が大川だという（「私の追憶」③五八〜五九頁）。これより前の回顧では高田は、病気休学が終わって復学したばかりであったが、問題が起こったとき、「校長の処置を不当として、私は委員の先頭にたつて辞職勧告に出かけたが、功を奏せずしてかへつた」（「思想流転の記」一三頁）。「各組代表の

会合に於て私の主張は辛うじて通過した」。しかし、その後二、三日、友人の世話のため休んでいる間に「情勢は一変してゐた」（「思想流転の記」一三頁）。生徒大会の大川は演説によって、各組代表ではなく、学生それぞれの直接的に感情に訴えることによってクーデターの学生に学生の全体意思の変革を計ったのであった。

大内は先の回想よりさらに三〇年後に、大川の「リーダーシップがすばらしかった」と言つて栗野事件を振り返っている。「秀才としては高田保馬も有名であつたけれども、英雄的声望においては大川は何人よりも上で、彼が颯爽として風を切って学内を闊歩するとき、われわれ下級生は一步譲つてその勇姿を仰ぎ見るのであつた」（「学生時代の読書」五五八頁）。

大川の主張ではこうなる。「覚醒の時は遂に来れり。誠に五高を愛するの士が正に起つべき時は来れり」。様々な規則は「学校は吾等の自由を束縛」する表れであり、「自由の真意義を明らかにする事が当面の急務」である。勿論、自由は放逸や放埒ではなく、「其物自身」「人類自身」の「法則に従ひて行動する」ことである。「校則の存在は一面に於て……校友の道念と徳性」に対する学校の軽侮を意味する。こうして、自由の束縛による学生の動議に対する侵害は抑圧への反抗は正当化される。さらに、反抗する学生に対する退学・除名の処分は「教頭並学

生監の地位より見れば、或は一些事の観」がある。しかし学生自身からすれば「誠に生涯の理想に対する大打撃」である。「青春の情熱、禁め難くして僅かに校規の外に逸すれば、捕へて以て厳罰に処す。何等の容赦も同情も無き也」。教育者に必要とされるのは「血と愛と情」であり、寛大な処分こそが「校風発揚の光榮ある事業」と言い得るとした（『呶々録』五八―六一頁）。「大川君は此機に乗じて教頭以下の学校幹部を排斥すべしと主張した」と高田は判断した（『思想流転の記』一三三頁）。

『習学寮史』は栗野事件の項目で事件の対応に関して学生の対応に差異があったことを述べている。一高からの事件の波及に対して、高田が以前属した理系の「三部生は始めより、全然無関係の態度を取った」。反対演説を行うものもあったが「大勢には勝てなかつた」という。学校側は「鎮撫に努め」た。「高田保馬、瀧正雄、赤松智城、平井文雄氏などの一派は、頗る穩健なる考を以て、その間に善処する方策を講じたので、一時は鎮静の色も見えたが、それも夢の間で、再び非常なる勢を以て盛り返し」た。その首唱者が大川周明であり、参謀長が柏木純一であったという。校長は急遽上京し文部省と交渉した。省令は撤回しないが、適用は校長に一任することで事件の解決が図られた。こうして、大川の主張通り教頭の辞任退職と学生監引退、学生については不処分となった。桜井校長は翌年一月辞職

し、禁酒条項も廃止された（『習学寮史』一三四―三五頁）。

それでは高田が栗野事件で問題視したのは何か。先述したように高田は不公平な転学事件とその校長の責任を問題としたと言っていた。「われ等は貴族の子と平民とを差別待遇するが故にたつたのである、学校の統制はすべての上に一樣に及ぶ、これは忍ぶべきである」（『思想流転の記』一三三頁）というのがその根拠であった。大川とは異なつて、高田は学生の自由を束縛する規則の存在自体は問題にしていない。社会の変化に伴つて、学生の風紀が荒廃することについて高田は不安を持っていたのであろう。中堅会設立はその不安に基づいていた。かといって、「社会主義と詩人」に表れているように、高田にとつても自由を抑圧することに賛成しているわけではない。複雑な拘束が無限定に課せられることまで認めていたわけではないと思われ。しかし、栗野昇太郎が父慎一郎の特権的地位と政治家の力を使つてまで、転校することの問題性を高田は組上に挙げたというのであろう。

貴族と平民との差別待遇をすべきではないという主張を、一九〇六年の栗野事件の時期に高田が持っていたのかはわからない。事件の翌年一九〇七年九月、栗野慎一郎が外交上の功績により男爵となり、一二年には子爵に任じられている。事件当事者の栗野昇太郎は一校を卒業し東京帝国大学に入学、外交官

試験に合格し一九一一年に外交官補に任命された。二六年三月、四十才で死去した(『子爵栗野慎一郎伝』三八八〜九〇頁)。後に続く経緯が影響したとも考えられる。またこの思い出が語られた一九三〇年代の高田の考えが反映していることとでもできる。拙稿「高田保馬の部落問題論」で指摘したように、京都帝国大学に進み、社会学を米田庄太郎のもとで学んだ高田は、一九二〇年代の後半には部落問題の解決することの必要性を融和事業・運動に関係する講演会で訴えた。森嶋通夫のいう部落問題への関心は、栗野事件の時期まではさかのぼり得ないように思われる。

しかし、次のような事実も想起する必要がある。高田が社会学を体系づけた著作が『社会学原理』であることはよく知られている。この内容をここで触れることはしない。高田は社会学の特権的地位を否定して「社会科学界の一平民としての社会学」(四〇頁)たることを求めた。「社会学に対して与へられたる特別の地位は何等理由なき者として之を剥奪せざるべからず。社会学は此特権の喪失によりて当然他の社会科学と同一水平線に墮ち、社会的学問界の一平民たらざる能はざるなり」(四三頁)。この口調は栗野事件を振り返った高田の言い分と連動しているように思われる。その点では高田にとっては身に着いた思考方法とも考えられる。ここでは、中学以来の貧困への関心の持続

を想定することにとどめよう。大学での社会学の大きなテーマの一つは階級の問題に絞られていくが、それは社会の中での資源の不平等の分配に起因する貧困の問題と大きく関連していた。高田は栗野事件を通して貴族と平民との階級差についての関心とその解消の必要性を確認したと思われる。そうした社会主義を実現する社会運動に生涯をささげるためにも社会学の理論的探求が必要と感じられた。

高田は言う。「社会主義的情熱をた、へて京都に來た。それは社会学を通して社会主義を一層明確につかむためである」(『思想流転の記』一四頁)。社会学への関心は貧困の問題・社会主義への関心と結びついて、高校時代に固まっていた。五高・「龍南会」の先輩であり従兄に当たる池田秀雄から有賀長雄のスペンサー流の社会学の書物を読んだ。京大入学に備えて、東大社会学教授の建部遯吾や東京専門学校の遠藤隆吉の書物、タルドの「社会法則」、ルネ・ウォルムスの著書も読もうとしたという(『学問の旅』①、「私の追憶」②)。京都大学を選んだ理由としては、親友である「瀧正雄が経済学を学ぶために京都に行くから、一緒に行かうと思ったこと、文学部の創設時期であり新鋭の教授が多いときいたこと」、さらに「年老いた母になるべく近いこと」、「休学後回復が完全ではないため閑静の京都を選んだ」と回想している(『学問の旅』①二五頁)。政治家と官僚を目指

す同級生が多く東京帝国大学を進路に選ぶ中で、京都の文科大学哲学科の属する社会学に進路を選んだ高田にとっては、「どういふ世間的進路をとるかについて、何の意識も計画もなく、卒業後しばらく学問を修行して、社会運動に入る準備をしたい」（『学問の旅』①二六頁）というのは後から正当化の発言ではなかった。

四 社会学を目ざして―米田庄太郎とともに

一九〇七年九月、高田保馬は上洛し、京都帝国大学文科大学哲学科に入学した。哲学・教育学・社会学講座で構成される哲学科には三〇数名が入学したが開設されたばかりの社会学講座は高田一人であった。五高出身の同窓・赤松智城は哲学（宗教学）専攻であった。瀧正雄は法科大学に入学した。

社会学自体がこの当時、形成途上の学問であった。東京帝国大学ではすでに社会進化論の影響を受けた加藤弘之、外山正一が社会学を講義し、二〇世紀になると建部遯吾が社会学講座の担当教授として活動を始めていた。前述したように高田も、社会学の方向を定めるについて東大の建部、東京専門学校の遠藤隆吉などの社会学の概説書を参照したと回顧している。広く社会問題を扱う、雑誌『社会』や『社会雑誌』が世紀の変わり目

に発行されている。

京都帝国大学の社会学講座を担当していたのは非常勤講師の米田庄太郎であった。当時、高田より一〇歳年長の三四歳で同志社普通学校の教授でもあった。米田は、一九一九年に、専任講師に昇格、さらに翌年、文学博士になるのにもなって京大教授に就任した。結果的にいえば、米田は新進気鋭な若手研究者として京大社会学を創設したと評価される。高田は米田について後の回顧で次のように言っている。

「米田博士はアメリカのギディングス、フランスのタルドに学び、その上博覧強記と烈しき精進によって学殖少なくも国内に比較するものなしという状況であった。ただ国内に於てもままとまった著述を發表されるのが遅れたこと、又一部の人をして云わしめると、当時の帝大出身でなかったことの故に、学内に於て認められるのが早かったとは云えぬ」（『私の追憶』④五六頁）。

米田は一八七三年奈良町に生まれた。聖公会系のキリスト教学校奈良英和学校時代に司祭ドーマン (Issaac Doonan) に援助を受け、アメリカに赴き、神学と社会学を学ぶ機会が与えられた。高田の紹介にあるようにニューヨークのコロンビア大学でギディングス、フランスでタルドに学んだ後、日本に帰国し、アメリカ時代に知り合った同志社関係者の推薦で同志社の教授に就任し社会学や語学を教えた。京都帝国大学文科大学の設立

委員だった谷本富と知り合い、その推薦で京大社会学講座の担当者になった。谷本との関係は高田をも含めて長く続くことになるし、一九一〇年に赴任する西田幾多郎と米田との関係は晩年にまで及ぶことになる。

米田が抱えていたのは国内で高等教育を受けていないという学歴の問題だけではない。高田が米田に師事し始めた二年後の一九〇九年の名古屋のある新聞には次のような記事が掲載されている。「明治の御代の天津日の光は限なく民草の上に及びて華族も新平民もひとしく陛下の赤子である。然るに一般の社会は尚新平民の階級を卑しんで絶えて交際する者はいない。……一般社会のこれと交際を厭ふのも強ち無理ならぬ次第ではあるが、これ彼等が無教育の致す処の罪で人間としては決して我々と差別あるものではない。現に奈良の新平民部落からは日本有数の社会心理学者米田庄太郎君（現京都同志社教授）をさへ出している。若し社会が彼等にあた、かい同情を以て接したならば自然と彼等が優美になるに違ひない」（『扶桑新聞』六月二八日、松浦国弘編、二四三頁）。

高田が米田の出自について知っていたかはわからない。しかし師の出自に関する「うわさ」を聞いたことはあったことは推測される。高田の部落問題への関心も高田の経験によっているのかもしれない。米田の弟子で京都市社会課に勤めた森賢隆も

部落問題の改善を論じている（「特殊部落改善管見」『中外日報』一九二〇年に連載）。その点での影響力も興味深い。

米田が日本では正規の学歴を持っていないこと、被差別部落の出身であることなどは、米田の京都大学での立場を不利なものにした。米田の教授就任が遅れたのもその出自のためともいわれている（桑原武夫「人間の戦い」）。米田のもとで社会学を専攻する高田から見れば、正規の指導教授がいまいということであり、研究の継続、さらに大学・大学院終了後の就職についても色々不利な点があった。高田は京大を卒業した後の時代を「多難な講師時代」として回顧している（「私の追憶」⑦）

⑧。米田は自らのハンディキャップを克服するために「烈しき精進」に努めねばならなかった。米田の次のような発言がある。「帰朝後、殊に京都帝国大学文学部に関係して以来、私の地位を保つ唯一の途は、只益々私自身の実力を養ふより外になかったが為に、日夜研鑽に力を集中したが故に、ゆっくり先生を訪ねる暇がなかったことを、今は非常に遺憾としている」（米田庄太郎「ドーマン先生」二〇頁）。肩身の狭い立場の高田も同様の努力をする必要があった。師である立場の米田もそういうように仕向けた。

高田自身は、『社会学原理』の序では次のように米田との出会いを語っている。

「顧みれば明治四十年夏九月の末、はじめて先生を室町一条の邸に訪ね、社会学専攻の志を述べてより既に十有一年、其間不断に懇篤なる教導と提撕とを忝うする事を得たり。内外の社会学界を通じて学殖其匹を覓め易からずと称せらるる先生に師事し、其庇護によりて社会学界に生れ得たるは、著者の深く自ら幸福とする所にして、此不敏なほ斯学に幾分の理解を有するもの、皆実に先生に負ふ」と。

高田にとって社会主義を実現する社会運動の導き糸として社会学を位置づける姿勢そのものが米田による批判にさらされた。求められたのは原典の購読と特殊の問題についての事実の蓄積であった。普通講義として第一目目に「ギリシャにはじまる社会学前史で、コントに終わった」。その継続を2年目の特殊講義で学び「幾年かつぎジンメル、タルド、デュルケムの三高峰に及ん」だという。二年目からの普通講義は米田独自の社会学概論になった。それ以外に、米田の指導による演習でタルドやグロツパリーを読んだという。この授業の報告として「結社性(ソシアリテイイ)に関する学説の発達を論ず」と「ギディングス社会学の発達」をまとめ、スペンサー、ウォード、スモール、エルウッド、デュルケム、ジンメル、グンプロヴィッツなどの書物を渉獵した(「私の追憶」④五六〜八頁)。こうして高田の運動・主義から理論・学問への方向転換が準備された。師であ

る米田と同様の日夜の研鑽による実力の養成が目指されたのであった。

米田は同志社においても教授就任直後の一九〇二年三月同志社講学会を設立して、講演会などを開催している。京大でも自分のうわさが広がる中で一九〇九年四月には京都帝国大学社会学会を設立している(『芸文』二卷一号)。高田も米田の協力者として、社会学会で報告を行っている。同年一月一九日の社会学会では、米田が「軍人氣質」、高田がプラトンの「乱婚論に就て」の講演を行うと報道された(『京都日出新聞』同日)。一九一〇年一月七日の社会学会例会では、米田が「文芸批評と社会」、高田が「家族の将来が社会の団結に及ぼす結果を論ず」の講演が予告されている(『日出』一〇月四日)。一九一一年一月二七日の社会学会では米田が「現代文明と女性」、高田が「独逸に於ける社会主義者」(『日出』同日)、四月二三日の例会は、高田が「現代文明の誤れる進路」、米田が「ニーチェと社会学界の新傾向」、谷本富が「ソリダリティ」などの講演をした(『日出』四月二二日)。この講演会には、河上肇のもとで経済学を学んでいる、高田とも知己となった榊田民蔵が参加している(『榊田民蔵・日記と書簡』三二二頁)。

これらの高田の講演は、プラトンの乱婚論は「原始乱婚ニ就イテ」として『経済論叢』四卷一号(一九一七年)、家族の将来

については「家族の崩壊が社会団結に及ぼす結果」として『芸文』一卷八号（一九一〇年）などに活字化されている。「現代文明の誤れる進路」の論旨は「高田文学士は貧困の程度及数は文明の進歩に伴ひて激増するものなりや、幸福不幸の増減の如何に就いて歴史的科学的に縷述し、今後人類の欲望特に自己が社会的勢力を得んとする欲望、自己の利益を専擅せんとする欲望は益々拡大せんとす。是等は悉く社会的階級に関係するものなり。社会の進歩に伴に貧困は漸漸改善に赴くものなりと雖も富の急速なる発展に比較する時は恰も龜と兔の如し。おなじく歩行なりとするも其懸隔甚だし。是最も憂慮すべき問題なりと論及せり」と『日出新聞』（一九一一年四月二四日）に掲載された。簡単な紹介にも、貧困の解決を求める青春期の高田の関心が持続していることと、社会の進歩の背景に「自己が社会的勢力を得んとする欲望」が働くとする後の高田の勢力論の考え方の萌芽を読み取ることができて興味深い。

高田は一九一〇年、卒業論文として「分業論」を提出し、九月にはさらに社会学を研究するために大学院に入った。米田庄太郎の指導は継続することになる。この年には、かねてから関心のあった与謝野鉄幹・晶子夫妻の主宰する短歌集団・新詩社に入会する。和歌に対する関心も持続している。社会運動についても関心がなくなつたわけではない。後年、一九一二年の一

年を振り返って、「桂内閣の没落、憲政擁護運動などの号外のべルは若かりし胸の血をたぎらせたり」と記している（『ふるさと』改訂版）。米田門下には、後に大阪市社会課で社会行政の中心となる山口正が学ぶなど、米田シューレ¹³でも呼ぶべき集団が造られつつあった。米田を中心とする講義、研究会で高田が指導的役割をもつことが期待された。一九一三年に米田と東大の建部遜吾を中心¹⁴に作られた『日本社会学院年報』には、京大での米田を中心とする社会学研究会の様子が報告されている。

高田から一年遅れで一九一一年に京都帝国大学法科大学を卒業して大学院に進んだ瀧正雄と経済学読書会の活動を始めた。教授の戸田海市や留学前の河上肇が加わり、米田庄太郎も時には参加した（私の追憶〔⑥五六頁〕）。高田の関心は経済学にも及んでいく。マルクス主義の批判的検討を行った「資本家的集積説の研究」が発表されるのは一九一二年の『京都法学会雑誌』七卷一二号からであった。こうした研究を広げる一方で一九一二年からは、京都の妙心寺の臨済宗大学で社会学を、一三年からは関西大学で経済学講読を担当する非常勤講師として、教育の面での活動が始められることになった。

高田にとつての青春は終わろうとしていた。

注

- (1) 同志社大学社史資料センター所蔵の非常勤講師名簿には高田保馬に関して「大正七年四月一日大学政経部講師委嘱ス報酬年額式百四十円支給、大正八年三月限辞任」とある。この資料については資料センターの便宜を頂いた。感謝します。なお、同志社と高田の関係については別稿の課題としたい。また、本稿での引用に典拠については本文中に頁数を記していく。引用文献は最後の参考文献を掲げた。連載物については一回目の二三頁は①二三頁のように記している。引用中の旧漢字は新漢字に改め、句読点などを加えた箇所がある。／は改行、……は省略を示す。また差別・人権にかかわる部分についても資料を尊重した。
- (2) 森嶋は同様の主旨を高田の経済論の英訳に対する序文におさしも行っている。Foreword to *Power Theory of Economics*, Macmillan, 1995, pp.11-25。部落問題は英文では「The question of … discrimination against the burakumin (untouchable)」としている。これらの論文でも触れられている戦時期の京大生の「京都学派」などの戦争協力派に対する違和感も自伝「ある人生の記録」でも述べられている。京大経済学部への進学も、社会学への関心からであり、社会学を教える高田が経済学を教えているからと父親を説得したと述べている。
- (3) 下村は内田夕闇の号で『帝国文学』一一卷一二号に投稿した「送迎聖詩」を最初にして頻繁に詩を載せている。友人であった高田の詩文の掲載については未見。なお、後述のトルストイの日露戦争批判のロンドンの「タイムス」の記事については、その直後の『帝国文学』一〇卷九号に斉藤新策「トルストイ伯の日露戦争論を読み現代の文明に対する彼が使命を懐ふ」が掲載された。
- (4) 大川周明研究では遠山三良に大川が師事していたことが指摘されている。大塚健洋『大川周明と近代日本』五三頁。大川も草葉町教会に通い、後にはキリスト教会系の「道会」に入会するなど宗教的な経歴において類似したものをもっている。五高での社会主義の摂取についても両者が共に積極的な役割を果たした。しかし、栗野事件については両者がリーダー的役割を果たすが、それぞれの方向性は異なっていたことは後述する通りである。
- (5) 大林宗嗣については永岡正己、梅木真寿郎「大林宗嗣のセツルメント思想」『評論・社会科学（同志社大学文学部）』八六号（二〇〇八年）、梅木真寿郎「大林宗嗣」（室田編著所収）参照。大林は青山学院卒業後、シアトルで牧師を務めて帰国、大原社会問題研究所研究員、一九四一年同志社大学教授に就任する。大林の大原社会問題研究所の同僚であり、妻の姉妹の夫に当たる高田慎吾は一九〇〇年から五高に通い、クリスチャンとして花陵会のメンバーとして活動している。『花陵会百年史』。高田慎吾については片岡優子「高田慎吾」（室田編著所収）。
- (6) 大川周明は、学生選抜制度の変化によって熊本に来たことを告白し、その結果として、五高魂、五高校風というものが存在しないことを直視すべきだと述べた。後述の栗野事件は「学校と校友との間に築かれたる総ての城壁を打破」する機会ととらえられた（大川「呶々録」六一頁）。入学制度による学生の変化

の一端について、栗野事件を五高の新入生として経験した大内兵衛は同窓で兵庫県社会課長などを勤めた小田直蔵の著作の序に次のように書いている。「当時の制度で高等学校の入学試験制度は全国統一して行われていて成績によって各地に配給されることになっていたので、兩人とも成績があまり良くなかったのでこういうところに配給されたものであった。……五高では教室でも、寄宿舎でも熊本語が優勢で外来語はなかなか通用しないほどであった」。小田直蔵『社会事業夜話』（一九六四、兵庫県社会福祉協議会）。学生の中に、九州の地元出身者と外来者の対抗が窺われる。高田保馬と大川の感情的な対立もこのことに起因しているのかもしれない。

(7) トルストイについては一九世紀末以来、文壇や思想界で大きな影響をもった。大川に影響を与えた徳富蘆花をはじめ、森鷗外に至るまでトルストイを論じている。高田が読んだと回顧している加藤直士訳のトルストイの著作が多く発行された。加藤は『トルストイの日露戦争観』翻訳刊行している（一九〇四年八月、日高有麟堂）。訳者の序で「聊か以て吾国民の反省を促がし」たいとするが、日露戦争そのものについての反対しているわけではない。高田は後の回顧で文学青年であり社会主義青年を自任していたので「戦争自体に対しては、ことに農村青年が戦場に呼び出される現実を前にして、批判的な気持ちをもっていた。しかし祖国が弱者の地位から高まることに對して祝うということを否定したのではない。若い心に民族の血のたぎるのを抑えなかった」と述べている（『私の追憶』②五八〜九頁）。日露戦時のトルストイの平和論の紹介については、山室信一

『日露戦争の世紀』（二〇〇五、岩波新書）二二九〜三四頁、参照。高田が京大で社会学を学び出した後の一九一〇年七月にトルストイは重態に陥り死去することになるが、師である米田庄太郎の談で『日出新聞』（七月九日）は「トルストイ伯の思想」を掲載した（文責記者）。トルストイの「非抵抗思想を神学上より見るに基督教教訓の或る一部分を抽象して其を極端に且つ偏狭に推展せるもの」であり「社会上より観察するも人類の原始時代より存したる単純なる利己的思想と利他的思想の一部分のみを執つて社会現象を立論せんとしたる也」、従って「現代の強烈なる工業的文明都市的文明に對比して過去の農業的文明田園的文明手工業的文明を引戻し繰返さしめんと試むるに過ぎざるなり」と否定的に評価している。高田にとっては工業的都市的文明に對抗する田園的手工業的文明に対するトルストイの肯定的態度に親近感を覚えたのかもしれない。米田と高田の発想の基盤にある都市的・農村的人間関係への評価の差異が窺われる。

(8) 「学問の旅」①二四頁によれば、中学五年の時校友会雑誌に「刑務所の囚人を歌った」詩を発表し「長論文は救貧のことを論じた」という。しかし手許の雑誌は散逸し、母校に探しに行つたが「終戦の時に焼きすてたといふ。永久に失はれたと思ひあきらめている」。

(9) 幸徳秋水の影響は、単純な語句の用例も指摘できる。例えば、所謂「産業予備軍」は「社会主義神髓」の訳語「工業的予備兵」が使われ（『わが牢獄観』①二五頁など）、マルクスの盟友は「エンゲル」と記される。思想的には孟子的な志士仁人の実践を重視する点、トルストイの影響に表れている都市的・工業的文明

に対する拒否感が挙げられよう。

(10) 高田保馬の故郷の佐賀県小城郡には天山という山があり、土地の人々から愛されているという(同地の中村久子さんからの教示による)。恐らく、高田も同じ感情で天山を号としたのであろう。高田の返歌には、闇をもたらず文明(近代)に対する両義的な思いが表明されているように思われる。

(11) 高田保馬とともに中堅会メンバーの一人であった谷龍之助は、日露戦争が終結するまぎわの一九〇五年六月『龍南会雑誌』一一二号に「社会主義者を迎ふるの辞」を発表している。「現代青年学生の無気力、無節操、無定見」がひろがるなか龍南の地に「社会主義者の一団を得たる」ことについて賛否の輪が盛んになることを期待している(五一―二頁)。谷の立場も必ずしも社会主義を排除するものではない。谷の経歴は明らかではないが一九二〇年代の中央融和事業協会の設立とともに、融和事業年鑑の編集にもたずさわっている。

(12) 栗野事件については竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』に概要が記述されている。『大阪毎日新聞』一九〇六年九月二十八日「教育界の大失態」、「教育時論」七七三号「第一高等学校校擾」四〇―四一頁、同七七四号「一高騒動後報」三八―四〇頁、『龍南会雑誌』一一八号「転校事件顛末」四九―五二頁、大塚健洋『大川周明と近代日本』四九―五二頁の所引『九州日日新聞』(一〇月二五日)社説「五高の紛擾問題」などを参照した。

(13) 米田シュールという言い方があったわけではない。『日本社会学院年報』第二年第三・四合冊の彙報欄の京都社会学会の活動には次のような記述がある「新知識の探求と社会学的思想の

精錬に努力奮励寧日なき吾等同人の活動近来実に目覚ましきものあり。或は暗示の研究に、或は社会意識の思練に、或は都鄙研究の思弁的攻究に熱中するものあり、更に実際方面の研究には感化事業の考察に奔走するものあり。何れ劣らず高説を抱き卓論を恣にする様將來の活動、予想されて面白し。また第三年第一二合冊の活動報告には「新学年に入りて京都社会学会は八名の専攻生を有するにいたり空前の盛況を呈せり、従つて従来米田講師の私宅に於て会合せる読書会は之を学生集会所に移し、会員は自己の理解せる思想、乃至は創見の発表に先を競ひつゝあり」と報告している。米田を中心として活発な研究と研究報告、理論研究と社会事業への関心が定着しているのが窺える。ゼミ生としても山口正が「大都市の発達と其の意義」や「カントの法理学」、先輩としての高田も「原始社会に於ける結社性の発展」「社会結合の形式に就て」などを報告している。大学院から学者となったのは初期では高田に限られたが、京都市や大阪市などの社会行政には山口正、巖西真乘、銅直勇、森賢隆が関わり、その中から山口や銅直などが学問の世界に係ることになる。他に、米田の京大社会学の講座を継ぐことになる白井二尚、円谷弘、鈴木栄太郎などがいた。森賢隆については白石正明さんの教示による。

参考文献

- 大内兵衛(一九五六)「青年時代の読書」『大内兵衛著作集二卷』一九七五、岩波書店
大川周明(一九〇六)「呶々録」『龍南会雑誌』一一七号『大川周明

関係文書』一九九八、芙蓉出版

大塚健洋（一九九〇）『大川周明と近代日本』木鐸社

岡義武（一九六七）『日露戦後における新しい世代の成長（上・下）』

『思想』五二・一三三号

櫛田民蔵（一九八四）『櫛田民蔵・日記と書簡』社会主義協会出版局

熊本大学Y M C A花陵会（一九九六）『五高・熊本キリスト者の青春―花陵会二〇〇年史』

春―花陵会二〇〇年史』

桑原武夫（一九五〇）『人間の戦い』『部落問題』一四号

習学寮史編纂委員会（一九三八）『習学寮史』第五高等学校習学寮

第五高等学校開校五十年記念会（一九三九）『五高五十年史』第五

高等学校

高田ちづ子（一九八一）『父のこと』後掲『高田保馬博士の生涯と

学説』

高田保馬（一九三〇）『千反畑の家』『貧者必勝』一九三四、千倉書

房

高田保馬（一九三四）『思想流転の記』『貧者必勝』同右

高田保馬（一九三四）『誠友団回顧』『貧者必勝』同右

高田保馬（一九四〇）『郷土を懐ふ』『思郷記』一九四一、文藝春秋

社

高田保馬（一九四〇）『五高の頃』『思郷記』同右

高田保馬（一九三五頃）『五高水泳部の一齣』『思郷記』同右

高田保馬（一九四六）『歌集ふるさと（改訂版）』有恒社、初版は

一九三六年、日本評論社

高田保馬（一九四七）『経済学研究回顧①②』『経済評論』一九四七、

一〇〇十一月

高田保馬（一九四七）『洛北雜記』大丸出版部

高田保馬（一九四九）『学問の旅①④』『経済』三卷一〜四号

（一九四九、一〜五月）

高田保馬（一九五五〜五六）『研究回想①⑩』『財政』二〇卷一〇号〜二二卷七号↓のち加筆されて『学問遍路』一九五七、東洋

経済新報社

高田保馬（一九五六〜五七）『私の追憶①②④』『エコノミスト』

三五卷四一〜五一号、三六卷一〜一三号

高田保馬博士追想録刊行会（一九八一）『高田保馬博士の生涯と学

説』創元社

竹内洋（二〇一一）『学歴貴族の栄光と挫折』講談社学術文庫

田中和男（二〇〇四）『二〇世紀初頭の同志社と米田庄太郎』『キリ

スト教社会問題研究』五三号、

田中和男（二〇一一）『高田保馬の部落問題論』『佐賀部落解放研究

所紀要』二八号

永岡正己（一九八四）『川上貫一と大林宗嗣』（日本社会福祉大学）

研究紀要』五八号

日本基督教団熊本草葉町教会百年史編集委員会編（一九八五）『熊

本草葉町教会百年誌』

平塚篤（一九四二）『子爵栗野慎一郎伝』興文社

松浦国弘編（二〇〇八）『愛知県・底辺社会史資料集成・部落編・

明治編』近現代資料刊行会

松本汎人（二〇〇六）『火災の人―教育者にして伝道者笹森卯一郎

の生涯』鎮西学院

室田保夫編（二〇一〇）『人物で読む社会福祉の思想と理論』ミネ

ルヴァ書房

森嶋通夫（一九九四）「高田保馬」『思想としての近代経済学』岩波

新書

森嶋通夫（二〇〇五）「ある人生の記録」『森嶋通夫著作集別巻』岩

波書店

米田庄太郎（一九三三）「ドーマン先生」松島篤編『アイザック・

ドーマン師追憶録』教会時報社

付記

本稿は同志社大学人文科学研究所の第一三研究・戦後日本思想の総合的研究の中で筆者がテーマとしている高田保馬研究の一部です。二〇一一年三月二七日に憲法・政治学研究会で報告させて頂いた。参加された方々の様々な意見と批判を頂いた。五高校友会雑誌『龍南会雑誌』は熊本大学図書館のリポジトリに公開されているが、これを含めていくつかの資料の利用とコピー請求については龍谷大学深草図書館にお手伝いを頂いた。また佐賀大学元教授の白石正明さんには研究の方向や資料提供などの便宜を与えられた。ここに記して感謝します。

